

こたわ

死に強い拘りを持つ 思春期患者の看護

五稜会病院
小野智矢 浮田志保 佐藤ひとみ 八木こずえ

はじめに

自意識に目覚める思春期は気持ちが不安定になりがちで、家庭内の問題や学校での対人関係の悩みが多い

A氏

当院には死にたいとの訴えで入院する思春期患者は多く、今回、希死念慮が和らぎ、現実世界に目を向けられるようになったケースを振り返り、考察を深めたい

事例紹介

A氏 10代後半男性 行為および情緒の混合性障害

父は小学5年生の時に病死
現在、母と姉の3人暮らし
愛犬は入院の1年前に他界

- 小学生からイジメを受け続ける
- 高校は1年で中退し通信制高校へ転校
- 友人はほとんどいない
- 姉とは些細な喧嘩をして4年間口を開いておらず、折り合いが悪いと感じている母との会話も少ない

入院までの経過

- 小学生の頃から希死念慮、意欲低下、対人恐怖、イライラの症状が出現
- 生きる意欲がなく、リストカットや新聞紙を燃やすなどの自殺企図を繰り返す
- 入院1ヶ月前頃より希死念慮が強くなり、他院からの紹介で当院へ入院となる

死への願望が強い時期(入院後1ヶ月)

「この世に未練はない」
「入院している意味がわからない」
「早く退院して浄土に行きたい」
「死んだら好きだったお父さんや犬に会える」

A氏

- 生きる意味を無くし、死に魅せられている
- 不安・孤独、漠然とした死への思い
- 将来に対して極めて悲観的
- 自分の存在価値に対する虚無感(自尊感情の揺らぎ)

退院したい

死にたい

変わらないA氏

- 気持ちの変容無く「死にたい」を繰り返す
- 入院中も爪切りで自傷行為

その反面・・・

もっと話を聞いて欲しい！

最初の担当看護師の関わり

時間をかけ話を聞く

「死んだら家族が悲しむよ。死んだらやり直せないんだよ。」ということ伝える

考えを変えるよう説得

受け持ちNS

発想を転換した関わりと結果

死ぬこと以外に目を向けられるよう、A氏の興味・関心を見つけ、視野を広げるケアをしていこう！
自分の価値を肯定される体験・場所が必要だ！

【具体策】

- ①一緒に外出や卓球をすることで、同じ時間を共有する
- ②現在・過去に関わらず、とにかく褒める関わり
- ③デイケアの小グループ(ありびお)への参加

【結果】

- ①好きなアーティストの話、ダンスや卓球が得意なことがわかり、会話が増える。信頼関係ができ、A氏にとって安心できる場ができた
- ②デイケアに参加し、他者と過ごす時間を楽しめるようになる

【課題】一方、母・姉との不和により、頼る人がいない不安を表出！
➡ 家族への介入が必要！

親子関係の修復(入院1ヶ月～2ヶ月目)

家族と面談前

A氏

母

・自分が死んでも悲しまないと思う
・甘えさせてもらえない
・姉ばかり可愛いがってる

・生きてくれているだけでいい
・甘えさせてきたつもり
・心を閉ざしやすく優みがちな子
・平等に関わっている

面談

母との面談にてA氏が家族問題で傷ついてきた過去がわかってきた。数回に渡る家族調整により、NSが潤滑剤となり上手く噛み合わないお互いの思いを伝える。
母には「**人との繋がりをもち、孤独にさせないサポート**」をしていることを伝える！

面談後

Neとの長時間の話を求めなくなる。OTへの自発的な参加や自宅で絵を描くなどで1人の時間を過ごすことができるようになる。

A氏をカラオケに誘ったり積極的に関わるようになる
A氏を大事に思っていることを伝えるようになる

現実的思考ができるようになり退院へ

(入院2ヶ月～3ヶ月)

	入院時	変化後
発言	「死にたい」 「早く浄土に行きたい」	「死にたいって言わなくなったなあ」
行動	NSに依存	自発的にデイケアに参加する
考え	退院したい 居場所ない	入院して良かった 大学目指す

結論

- 1、出来る限り寄り添うことは孤独で死に憧れている患者との信頼関係の構築につながり、希死念慮を改善する基盤となった
- 2、“死への憧れを否定する関わり”より、得意なことを伸ばし褒める関わりが、自己否定の思いを緩和し、死に対する拘りが和らぐ結果に繋がった
- 3、家族の中での居場所づくりも含めた包括的な関わりにより、退院後にも孤独にさせない工夫が必要である